

に於て困難を感じない様である。換言すれば善は主觀の屬性で、美は客觀の屬性と云へる。今自然を認識主觀から觀すれば之を客觀と見なさねはならぬ。即ち自然自身は我々の目からは主觀と名づくる譯には行かぬ。故に自然が目的た適ふとか適はぬとか云ふのは單に我々主觀から名づけたものに外ならぬ。即ち其自然自身が努力して然うなつたと解釋するよりは寧ろ其自然自身が自づから然くなつたと解釋する方が穩當である。故に人が努めてなした善に對して自づから均齊調諧を得たと稱すべきものであらう。故に自然哲學の理想論は神の論であつて同時に美の論 (Aesthetics) である。

神の論に重きを置けば宗教的、美の論に重きを置けば科學的

美の性質、發表等に關する詳細の論議は一切美學に譲つて哲學に於てはただ美と自然との關係併ひに美と他の理想との關係を明にすればよい。併しながら今は是等の細説に入るを避けてたゞ以上に止めて置く。

以上を以て自然に關する本質過程、理想の三問題を敘述したが、これで自然の「何物、如何、何故」(Was, Wie, Warum) が解けたならば我々は更に益主觀的方面に重きを置いた問題に轉する。即ち、人生哲學の問題である。

(哲學概論第六章) を參照すべし

第三節 人生哲學の問題

自然の研究が自然を純客觀的と見るとより進んで漸次主觀的理想の點から觀察する様になつて行つたが、まだ自然の研究では其研究の對象たる自然が結局客觀的たるを免れぬ。それで更に主觀的方面に向て一步を進めやうとするならば、其研究の對象を主觀の範圍内に求めねばならぬ。人生哲學の問題が此に存するのである。

人生とは即ち研究者自身の經歷する所であるから、之に關する研究は其對象自身身が全く主觀的であると云へるのである。従て此研究問題の如何なる形に於て顯るべきかを推知する事が出来る。

前に知識哲學に於ては特別に現實と理想との二方面を分けて論ずるとは困難であるを示し、自然哲學に於ては現實の問題が主となつて理想の問題は單に従たるに過ぎぬとを説いたが、今此人生哲學に於ては反て理想の問題が主たるを明にせねばならぬ。其故は、人生は畢竟研究者自身の如何様にもなし得る領分

あつて、我々か此問題に對して特別な興味を感じる點も亦そこにあるのであるから、單に人生の如何なる状態であるかと云ふとを描寫するのみでは充分でない、必ず其人生のか、あ、ま、ほ、し、いと考へる事をも附論せねばならぬ。此人生に對する希望を基礎として、之から人生に關する種々の問題に入り、其中には自から人生はかくあるものであると云ふ現實的方面の論議にも入るのである。故に人生哲學は勿論人生の現實及理想に關する根本的研究を云ふのであるが、然しながら其現實の論究も終に理想の説と離れる譯にゆかぬ。

さて人生と云ふ語の解釋に就て更に微細の點に立ち入るが、先づ人間の生活を全體に引くめて見て、恰かも自然に對するが如く其を一個客觀的對象であるが如く看做し其の如何なるものなるやの論をすることが出来る。此立脚地は主觀的對象を客觀的に攻究せんとするもので自然哲學から人生哲學に移る段階である。然しなから固より人生哲學的立脚地は純客觀的なるとはないので、さる客觀的事項はやはり自然哲學の問題に屬するものであるから、例へば人生の組織、制度等を論究するのは固より此部分の問題ではなく、たゞ人生全體を總括して一體をば生

活に價するか否かを論ずるのである。即ち我々(即ち研究者は此人生全體の現實に關して如何なる價值を見出すか、望まじきか、望ましからざるか、是である。古來其兩様の見解に名つけて、樂天觀及厭世觀 (Optimismus; Pessimismus) と云つて居る。或人は之を以て快樂に關する事と限るが、今此に言ふ意味は必しも現世か快樂に充ちて居るか、苦痛に充ちて居るかと云ふとを論ずる計りでなく、あらゆる點に於て現世かよいか否かと云ふ價值の判斷に關する問題を包含するのである。

樂天厭世の是非は随分長い間の問題であつて、殊に詩人宗教家の側から説かれて居たが、然し哲學上餘り獨立の價值ある問題とは思はれぬ。それは元來哲學若しくは科學上の論となれば知力的考察を預想するから、何等かの意味で客觀的性質を具へて居らねばならぬ。今所謂樂天厭世の論を見るに、或る論者は種々の事實統計に照して社會の漸次改善せらるゝとか、或は墮落するとか説いて居るし、又或論者は哲學上の論據から陳述して居るが、充分に善惡の標準を定めずして、たゞ望ましいとか否とか云ふ間は、其論は要するに感情的、從て主觀的に過ぎぬ。換言すれば多少價值の問題に入る以上は單に現實狀態の研究に止まらずして、一步を

理想の論に進めねばならぬ。

一九〇

かく所謂人生觀の問題は善惡の論即ち所謂倫理問題を離れるとが出来ぬ。從て人生哲學のには理想を離れての問題か成立たぬとが證明されたのである。然らば今假りに理想的研究を豫想して人生の現狀に關する評價を下せば所謂樂天と厭世との外に執るべき立脚地がないかと云ふに前に述べ來つた哲學上の立脚地から論し來ると、是等二見解は共に哲學上や、誤まつた立場から論ぜられて居るとを發見する。其譯は、元來世界即ち認識の對象は主觀の所生と解し得べきものであれば、我々か此自から作り出した世界を苦或は樂と觀じて恰かも客觀的物象の如く考へるのが既に誤まりなのである。我が認識と感情とを離れて別に世界の絶對的價值があるべき理がない。今假りに世界其自身が獨立に存在し得るものとするも、之を認識する人の性格氣質如何によつて其世界は別々の形となつて顯れる。從て世界人生が望まじきと否とは全く觀察者にあるので、古來論争の府となつて居た厭世樂天の兩説は共に問題の解釋法を誤まつて居る。我々は事實上人生の決して圓滿でないことを承認する、或はかゝる世界に全く顯れて來なかつた方が反てよかつたかも知れぬ。然し既にそれが我々自身の世界となつた上は單純な外部的事變と認めるとは出來ぬ、我自身の關係する所である、此世界を外にして他に圓滿なる人生を得る望みがあらうか。然らば此點から考へると、欠陥に富むだ人生は同時に考へ得べき最完全な人生と云はねばならぬ。厭世と樂天との調和の點は此處に存するのではないか。

上述を以て人生の價值が人々の知情によつて主觀的に定めらるゝとを説いたが、なほ此に問題となる點は、此人生に對して我々は單に外部から認識し感情を惹起すと云ふに止まらず、自ら此人生を経験するものであると云ふとである。夫既に觀念論的立脚地によれば自然は我が觀念ではあらうが、然しなほ我自身の經驗する事柄ではない。然るに如何なる立脚地を執るにせよ、人生は自己が經驗する所、如何なる度までか、自己の自由に變更し得る所である。故に我々は單に苦痛多き世界に住して之を苦痛多しと觀ずるに止まらず、其苦痛を轉じて、快樂にしやうと企てるので、即ち單なる知情の作用に止まらず、此に意志の働きが參與するに至るのである。是に於て今まで哲學の問題に上らなかつた意志の論が、此に顯れ

て来た。

上來我々は人生と自然との區別を連りに説いて居いたが、其區別の根本は今謂ふ所の意志の有無に歸するのである。即ち人生は意志ある者の結果として生じた現象で、自然は意志なくして生じた事柄である。然るに若し唯物論に従へば人間の精神作用は凡て物質的身體の作用に外ならぬから、意志なる一の精神作用も亦物質界即自然界を支配する法則を脱するとはない様に思はれる。然らば如何なる理由によつて意志が他の自然界と異なつて自由であると云へるか、或は意志は本來自由ではなく、單に自然界の法則によつて必然的に束縛せられて居るのではないか。是に於て意志に關して自由論即非決定論と必至論即決定論 (Indeterminism, Determinism) とが對立して居る。而して此問題は單に倫理上の意味を有するのみならず、寧ろ神學上一種の必要を認められたとから一時歐洲學界に於て盛に論せられた。然し近世に至つては最早其等神學上の爭論は意味を失つて居るが意志の自由如何に就てはなほ充分一定して居らぬ。概して言へば心理學者殊に唯物論者と同じく自然科学に重きを置く側では必至論に傾き、倫理學者殊に唯心論

の歸結に近い論斷に従ふ者では何等かの論據で意志の自由を主張する。而して現今多數の學者に従へば、自由論と必至論とはたゞ其説の表明法に於て相違があるのみで、實際は殆ど同一の結論に到着して居る。即ち意志は自由であると云ふのは、意志が一切の法則を離れて隨意に變更し得ると云ふ意味ではなく、心内の原因から必然的に生じ來つて外部の事情に左右せられるのみのものでないと云ふとに歸するので、決して自然科学などの法則を無視しやうとはせぬ。たゞ哲學上の論據や、其見方の相違によつて多少重きを置く所がちがうのである。然らば我々は如何の立脚地を執るか。此に之を確定する必要はないが哲學一般の傾向として、唯心論に傾く所から見れば自由論の名稱を選ぶ方が適當であるやうに思はれる。加之、人生哲學の視點から云へば、單に心作用か法則に従て活動すると云ふ點のみならず、其作用が自己の直接に經驗する所て何となく他の自然現象の如く間接に經驗せらるる事柄とは異かうといふ意識に基つくものであるから、自から其必至的方面よりは自由の方面に重きを置くのは當然であらう。たゞ自由と云ふ側を強く言ふと心理學の研究に反對する様な恐れがあるから、此點だけは務め

て避けなければならぬ、即ち此に人生哲學第二の問題は如何なる意味に於て意志を自由なりと云ふべきかと云ふこととなつた。

さて意志を自由なりと論定したならば、此に始めて意志の顯れた行爲に就て是非の批評を下すことに意味が出て来る。單に我が認識するのみならず其意志を用ゐて自ら作出した人生ならば、之に就てかくあつたらばよからうと云ふ註文をなすとは當然である、即ち第三に、人生の理想に就て充分論議する餘地が生ずるのである。通常所謂倫理問題は即ち是である。

人生の理想即道德を論ずるに當つて、二ツの方法がある。一は豫め或標準を定めて之によつて行爲の價值を定める方法で、此場合には人生は正邪の二範疇中に包括せられる。然るに此標準自身が必しも永久不易ではないと云ふ事實を發見すれば、人は其正邪をして正邪たらしむる一層深い根據を探らうとする。是に於て第二の方法が生ずるので、即ち人生の目的に適ふと否とによつて行爲を評價するのである。換言すれば、人の行爲は相集まつて人生をなすものであるから、其各行爲は人生の全林を作るに耻ぢざるものでなければならぬと云ふことを考へて、行

爲を判定するのである。此場合には凡ての行爲は單に正邪と名づくべきものではない。何者、別に何時も定まつた標準はないから、標準に合すると云ふ意味の正と云ふ概念は此場合にはあてはまらぬからである。それで又かゝる場合には美醜の範疇もあてはまらぬ、何者、美とはたゞ觀ずるものに就て名づくべき語で、意志の自由が存する所には用ゐられ難いからである。それで此場合には善惡の範疇が最適當であらうと思ふ。何者、善とは意志を有して(若しくは有すと假想して)或目的に適ふ場合に一般に名づくるものであるから、行爲か人生の目的に適ふと云ふとを顯すに最適當であるからである。斯様にして人生の理想に關して二様の方面が區別せられる、即ち一は法則、觀て一は目的、觀である、一を名づけて形式的見解といひ、一を實質的見解とも云へる。

古來人生問題に關して種々異説の起つたのは、一は是等法則及目的の意味に就て異解があつたからであるが、又此兩方面を混同したからである。是等兩方面は何れも欠くべからざるものであつて、形式的法則のみを以て人生を律すれば停滯を來し、實質的方面は常に何等か其時に相當した法則を作つて其規律を定めるの

である。然るに形式論のみを以て人生問題を定めやうとする者は往々見る所であつて、又實質のみに重きを置いて所謂道德の變化のみを認めるものも少なくないが、共に一面を見たものである。道德は人生の目的によつて定まる故に其實質は其目的を達する爲に絶えず變化するが、其一般形式なるものは人生其者が主觀的統一を得て認識せられる限り勝手氣儘に變化すべきものではない。故に此點に於て我々は先づ古來の偏頗なる見解を調和したいと思ふのである。

更に形式論と實質論との詳細に入れば、種々の異説に遭遇するが、先づ大體に於て形式論には、**外律論**と**内律論**、**他律**と**自律** (Heteronomie; Autonomie) との二に分ける。前者は標準が外部(例へば風俗習慣の如き)から定めらるゝとするもので、後者は内部(即ち人の良心)に標準が自から定まつて居ると云ふものである。道德の論としては後者の方が一層進んだ説明と看做されて居るが、然し實際上やはり其内部的法則も外部的法則の體を具へて始めて眞に効力を有するのであるとも看過してはならぬ。而して其所謂内律論にも種々の別があるが、其説明か完全に近づけば、其内律が人生全體の目的を代表するものと解せらるゝに至るのであるから、是に於て形

式論が終に實質論に入るとになる。

實質論は人の本性に關する解釋によつて異なつて行くが、大體に於て知に重きを置くものと情に重きを置く者との二に分れる。知に重きを置くと云ふよりは寧ろ感情の満足即快樂を抑ゆる者と云ふ方が適當で、情に重きを置くとはつまり感情の満足即ち快樂を求める者である。是れ所謂**快樂主義**と**嚴肅主義**と (Hedonismus; Rigorismus) の爭論の點であるが、此二論は共に人性に關する解釋を誤まり、自我の本質を知若しくは情の一部と見たによつて生ずるので、若し自我は知情意全體の統一なることを知れば是等兩論の各偏頗なることを解し得るであらう。且つ其のみならず、快樂主義にして屢唯物論と結托し、嚴肅主義にして唯心論に關聯するものが多いので、哲學上また其點に關して適當なる解釋を圖らなければならぬ。以上の他各論に就てそれ〴〵詳細な論議もあるが、こゝにはたゞ一般哲學上の立脚地と關係ある點のみを併列して、哲學諸問題の終結點を示した。

本講は此最後の章に就て猶一々論究する積であつたが種々の障礙などの爲に抄取らず、終にたゞ問題のみを掲げて暗に解釋法を示すに止めた。なほ此點に就ては「哲學

62
394

哲學綱要終

概論』などを参照したならば幾分か得る所があると思ふ。且つ哲學の大意を説く場合
には以上の如き序説でも其目的を達するに於ては大なる遺憾はないと信ずる。

子
子
子
子
子
子
子
子
子
子

終

